地球を集める

バタックのタイコ

福岡 正太
（ふくおか しょうた）
本館文化資源研究センター

バラエティに富んだ楽器

タイコは、世界でもっとも広く見られる楽器のひとつである。しかし、その形や奏法、そしてそこから生み出されるリズムは非常に多様であり、世界の音楽の共通性と多様性を体現する楽器だと言ってもよいだろう。タイコは、数年後のリニューアルを目指すみんぱくの音楽展示におけるテーマの候補のひとつともなっている。わたしは、リニューアルの準備のため、二〇〇五年七月、インドネシアのスマトラ島を訪れた。

北スマトラ州に住むバタック人は、トバ、カロ、パクパク、シマルングン、アンコラ、マンダイリンなど、いくつかの集団にわかれており、それぞれがタイコを中心とする合奏音楽をもっている。わたしは北スマトラ大学のリタオニ・フタジュルさんの協力をえて、これらさまざまな合奏音楽に使われる楽器を収集しながら映像取材もおこなった。

バタックの人びとのタイコは、集団により大きいものから小さなものまでバラエティに富んでいる。もっとも大きなタイコを使うのは、マンダイリンの人びとだろう。ゴルダン・サンビランとよばれる彼らの合奏は、九つの円筒形の胴をもったタイコがメインになっている（写真1）。いちばん大きいものは、一・五メートルほどの長さがあり、小さいものでも一メートル以上になる。それにサルネとよばれるオーボエ系の楽器一、小型のゴングが三か四、中型ゴングが二、シンバル一で演奏される（写真2）。

それに対して、もっとも小さなタイコを使うのはカロの人びとだろう。グンダン・リマ・サダラネン、あるいはグンダン・サルネとよばれる合奏には、グンダンとよばれる四〇センチメートル程度の長さの細長いタイコ一対と、サルネ、小ゴング一、大ゴング一が用いられる。一対のグンダンは、それぞれ母（インドゥン）と子（アナック）とよばれ、子のグンダンには、グラントゥンとよばれるさらに小さいタイコが結び付けられている（写真3）。ゴルダン・サンビランの音は、腹に響いてくるが、グンダン・リマ・サダラネンの音は、かわいらしいと形容したくなるような音だ。しかし、演奏が始まるとかなり激しいリズムを打ち出し、迫力があるのに驚く。

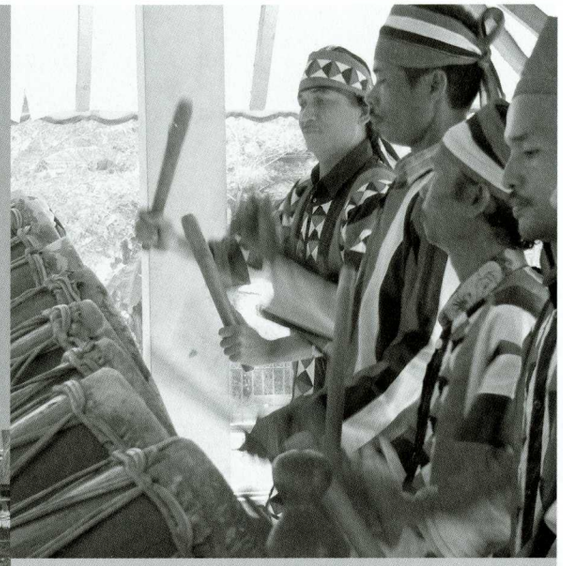
文化に根ざす存在感

これらのタイコ合奏は、バタック人の古くからの信仰にささえられている。たとえば、ゴルダン・サンビランは、結婚式や葬式でも演奏されるが、古くは、祖先の霊を呼び、霊媒を通じてそのことばを聞くために演奏されたという。今でも、演奏時に憑依（ひょうい）がおこることはまれではないそうだ。そのため、ゴルダン・サンビランを演奏する場合には、必ずスイギュウを犠牲にして、霊に対してそなえなければならない。

現在、バタック人の多くはキリスト教徒であり、少数派ではあるが、イスラム教徒もいる。そんななか、トバの古来からの信仰を守ることを信条とするパルマリンとよばれる組織がある。彼らは、ムラ・ジャディ・ナ・ボロンをはじめとするバタックの神々に対して祈りをささげる。その祈りには音楽が欠かせない。というよりは、音楽自体も神にささげる祈りとみなされている。そのときに用いられる合奏がゴンダン・サバングナンである。タガニンとよばれる五つのタイコとオダックとよばれるタイコのセット、ゴルダンとよばれる少し大きめのタイコ、大型のサルネであるサルネ・ボロン、オグンとよばれる四つのゴング、そしてヘセック・ヘセックとよばれるガラスのビンからなる（写真4）。

パルマリンの儀礼においては、このゴンダン・サバングナンに合わせて、手を自分の前であわせ、身体を上下させながら手を前後に軽くふるトルトルとよばれる一種の踊りをおこなう（写真5）。祈りをささげる相手により、それぞれ祈りのことばがあるように、演奏する曲も祈りをささげる対象によって決まっている。リーダーが、それぞれの神にささげる祈りのことばを唱えると、それに合わせて音楽家は適切な曲を選んで演奏をはじめる。すると人びとはこのトルトルを一緒におこなうのである。

タイコがきざむリズム、それに合わせて身体を動かす人びと。モノの収集と並行して、撮影したビデオによって、バタックの人びとの文化におけるタイコの存在感を、展示をとおして少しでも伝えるために、これからアイディアをしぼっていきたいと考えている。


（写真1）マンダイリンのゴルダン・サンビランの演奏

（写真2）マンダイリンのゴルダン・サンビランに用いられるゴングとシンバル、サルネ

（写真3）カロのグンダン（母と子）とサルネ

（写真4）ゴンダン・サバングナンの演奏。手前の奏者は左手でビン（ヘセック・ヘセック）を打っている

（写真5）パルマリンの儀礼におけるトルトルとよばれる踊り